

ビジネスとケアをつなぐ倫理

浜 渦 辰 二

Ethics Linking Business and Caring

HAMAUZU Shinji

Business Ethics seem to be a problem, how we can put on the brake against a runaway business. The role of ethics seems here to be a conservative and negative one, at the most a mediation between an egoistic business and an altruistic caring. But, since “ethics” was originally a science concerning “ethos”, it can be a science searching for an “ethos” (an image of human beings or a view of the world) which lies behind business. If we enter into searching for “ethos” of business and one of caring, a history of link and estrangement of both rises to the surface. On the background of this history, we can call just a contemporary movement linking both “Business Ethics”. Here I would like to contribute to the discussion of “To consider Business Ethics from different angles” by thinking about “Ethics Linking Business and Caring”. At the end of this paper I will find an example of such a movement in “social entrepreneurs”. Important is that we can find a conversion of meaning of “working” in their sense of values, i.e., that they work not for business seeking for profits, but for caring for others, nevertheless it makes their daily bread.

キーワード： ケアの倫理、ビジネスの倫理、エートス、社会起業家

はじめに

ビジネス・エシックスは、一見すると、利己主義的な「ビジネス」の暴走にいかにして「倫理」によってブレーキをかけるのか、という問題であり、そこで「倫理」の役割は保守的・消極的・否定的なもので、せいぜい利己主義的な「ビジネス」と利他主義的な「ケア」とのあいだを和解させようとする調停役であるかのように見える。しかし、「エシックス」とは、もともと「エートス (ethos)」についての学であるとする、ビジネス・エ

シックスとは「ビジネス」の背後に潜んでいる「エートス(人間観・世界観・人生観)」を解明しようとするものでもある。そして、「ビジネス」の根底にある「エートス」と、「ケア」の根底にある「エートス」を探っていくと、その間に、結びつきと乖離ないし分裂の歴史が浮かび上がってくる。そうした歴史を背景に、現代において両者を再び統合しようとする動きこそ、ビジネス・エシックスと呼ばれるものとも言えよう。ここでは、拙稿「ビジネス・倫理・ケア」¹⁾の続編として、「ビジネスとケアをつなぐ倫理」について考えることで、「ビジネス・エシックスを多角的に考える」ことに貢献したい²⁾。

1. ビジネスとケア：現代の状況

ビジネスとケアは、一見すると正反対の原理で動き、正反対の方向に向かっているように見える³⁾。ビジネスは利己主義的で、自ら(個人であれ企業であれ)の利益のみを追求し、他者(他社)への配慮を欠くものに対して、ケアは利他主義的で、自己犠牲をも惜しまず、他者へ献身的な手を差し伸べるように見える。そこから、ビジネスの倫理では、利己主義的な傾向を他者への配慮によってどのように制限することができるかが問題となるのに対し、ケアの倫理では、利他主義的な傾向が却って他者の自立を阻害したり他者に危害を加えることもあり、それをどう防ぐことができるかが問題となる、と考えられることになる。

しかし、事態はそれほど単純ではない。ビジネスは、必ずしも利己主義のみを原理としてはいない。自らの利益のことばかり考えていては、実は、ビジネスとして成り立たない。他方で、ケアもまた、必ずしも利他主義のみを原理としてはいない。ケアも、それなりの自分の利益にもなるという形で、仕事を評価してもらわねばやっていけない。それゆえ、実は、ビジネスとケアとは別々に切り離すことはできない。ビジネスのなかにケアが入って来ざるをえないし、ケアのなかにもビジネスが入って来ざるをえない。四六時中ビジネスのことばかり考えていたのでは、心身ともにもたないのと同様、四六時中ケアのことばかり考えていたのでは、心身ともにもたない。ビジネスにケアが入ってくることや、ケアにビジネスが入っ

てくることが生じる。問題は、それがどのようにして生じ、どのような内実をもつかであり、そのとき、倫理が問題になる。

キャロル・ギリガン『もう一つの声』(1982)⁴⁾によれば、「正義の倫理」の根底には、自己をあくまで他者から分離した自律的な主体として捉える人間観が横たわっているのに対し、「ケアの倫理」の根底には、自己は他者との相互依存性やネットワークの中に居場所を有するという人間観が横たわっている。それを手がかりに同じように考えると、「ビジネスの倫理」の根底にあるのは、「正義の倫理」の場合と同様に、自由で独立な権利をもつ強い近代的な人間観(個人主義的自由主義的人間観)であろう。そこでは、弱者(子供、病人、障害者、高齢者など)は考慮されず、ビジネスにとって足手まといになる邪魔な存在と考えられているのではないだろうか。それに対して、「ケアの倫理」の根底には、まさに、弱者、苦しみ弱く傷つきやすい人間、他者に依存する(せざるをえない)人間とそれに手を差し伸べる人間との相互関係という人間観があるように思われる⁵⁾。

新世紀に入って右肩上がりの経済状況の時代は終わり、少子高齢化のなかで経済成長を絶対的な目標としなくとも十分な豊かさが実現していく「ゼロ成長社会」としての「定常型社会」「持続可能な福祉社会」こそ目標にすべきだと言われている⁶⁾。〈ビジネスの世紀からケアの世紀へ〉という転換のなかで、二つの倫理が統合された「もう一つの倫理」を作り出すことができるかが、「ビジネス・エシックス」に問われていると言わなければならない。

2. ビジネスとケア：蜜月時代と乖離の歴史

現代では、ビジネスとケアは相反する性格をもつように見えるが、歴史を振り返ってみると、両者は元来このように対立するものではなかった。例えば、資本主義の揺籃期である18世紀を生きたアダム・スミスにおいて、ビジネスとケアははまだ幸福な蜜月時代にあったように思われる。この点で、彼の二つの代表的著作について、『道徳感情論』(1759)⁷⁾に基づいて『国富論』(1776)⁸⁾を検討するという堂目卓生の試み⁹⁾が興味深いので、これを参照しながら紹介しておく。

アダム・スミスによれば、人間のなかに利己的なものの追求とともに、他人への関心というもう一つの原理が働いている。『道徳感情論』の第一部第一篇「共感について」の冒頭は次の文章で始まる。「人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、明らかに人間の本性の中には、何か別の原理があり、それによって、人間は他人の運不運に関心をもち、他人の幸福を自分にとって必要なものだと感じるのである」。そこに働く心の作用である感情ないし情動をスミスは、「共感(sympathy)」と呼んでいる。それは具体的には、想像力によって、自分を当事者の境遇に置き、自分が言わば彼の身体に入り込み、或る程度彼と同じ人物になってみて、彼の感覚がどうであるかの概念を形成する、という仕方では生じるという。ここでスミスは、利己的なものの追求という「ビジネスの精神」とならんで、「共感の原理」を人間の本性と考えており、それは「ケアの精神」に繋がることが予測される。

他方、『国富論』に目を転じると、その第一篇第一章「分業について」の冒頭は次の文章で始まる。「労働の生産力における最大の改良と、労働が振り向けられ実施されるにさいの熟練、技術、判断力の大部分は、分業の結果であったように思われる」。しかも、この分業は、「それが引き起こす社会全般の富裕を予測し意図した人間の知恵の結果ではなく、こうした広い範囲にわたる有用性には無頓着な、或る物を他の物と取引し交易し交換しようとする、人間の本性上の或る性向の、緩慢で漸進的ではあるが必然的な帰結なのである」という。この性向が生じるのは次のようにしてである。「文明社会では、人間はいつも多くの人たちの協力と援助を必要としている」のだが、その助けを求めるとあって、「仲間の善意のみ期待しても無駄である。それよりも、もし彼が、自分の有利となるように仲間の自愛心を刺激することができ、そして彼が仲間に求めていることを仲間が彼のためにすることが、仲間自身の利益にもなるのだということを、仲間に示すことができるなら、そのほうがずっと目的を達しやすい」という。すなわち、交換という性向は人間の利己心によって刺激され、それが、おのずから分業を生み出すわけである。ここにはすでに、後に第四篇第二章の有名な「見えない手」に関する議論、すなわち、「各個人は、彼自身の利益

を追求することによって、彼が本当にそれを促進しようと意図するときよりも効果的に、社会の利益を促進する」という議論が先取りされているように思われる。利己的なものの追求が、結果としては利他的にも働くことになるのである。

こうした背景からスミスは、『道徳感情論』第二部第二篇第三章で、援助・世話について、今風な言い方をすればケアについて、次のように述べている。

「人間社会のすべての構成員は、相互の援助 (assistance) を必要としているし、同様に相互の侵害にさらされている。その必要な援助が、愛情から、感謝から、友情と尊敬から、相互に提供される場合は、その社会は繁栄し幸福である。そのさまざまな成員のすべてが愛情と愛着という快適なきずなで結び合わされ、言わば、相互的な世話 (good offices) という一つの共通の中心に引き寄せられているのである。／しかし、必要な援助が、そのように寛容で利害関心のない諸動機から提供されないにしても……、その社会は、幸福さと快適さは劣るけれども、必然的に解体することはないだろう。……そのなかのだれひとりとして、たがいに何も責務を感じないか、たがいに感謝で結ばれていなくとも、社会は、人びとが、ある一致した評価のもとで損得勘定にもとづいて世話を交換することによって、維持されるのである。」

スミスは、ここで「ケア (care)」という語を使ってはいないが、ここで援助や世話と呼ばれていることは、内容としては現代の用語「ケア」に通じる¹⁰⁾。このような援助・世話(ケア)について、堂目は、次のようにまとめている。「人間は、生まれてから死ぬまで、生存のために他人からの世話を必要とする。……しかしながら、無償の世話は家族や親しい人に対してのみ期待できるのであって、見知らぬ人には期待できない。……見知らぬ人から世話を受ける方法として考えられるのは、……私はあなたが必要とする物をあなたにあげよう、そのかわり、あなたは私が必要とするものを私にください。このように相手を説得する。つまり、自分の世話と見知らぬ人の世話を交換するのである」(p. 162f.)と。

こうしてスミスによると、人間は共感と世話に基づく社会的存在なので

ある。市場は富を媒介にして見知らぬ者どうしが世話を交換する場であり、それゆえ、ビジネスはケアを交換する場として考えられていた。堂目によれば、「共感という能力を用いて、見知らぬ者どうしが富(=世話)を交換する社会、これが市場社会なのである」¹¹⁾。こうして、スミスにとっては、分業と交換によって、世話(ケア)が市場(ビジネス)と結びついて考えられ、しかも、その言わば平和で幸福な結びつきが語られていた。

その後、両者が乖離して行った歴史は、資本主義の爛熟期、その問題が噴出して来た19世紀末を生きたマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1904/1905)¹²⁾に描かれている¹³⁾。彼は同書のなかで、「職業倫理」「経済倫理」を「プロテスタンティズムの倫理」から生まれた「資本主義の精神」が含む「倫理」「エートス」として論じていた。そこで描かれたのは、ビジネスとケアが乖離してしまった姿だった。

ヴェーバーの出発点は、「職業」「労働」という観念が変質したということであった。有名なルターの職業観は、「ドイツ語の“Beruf”という語のうちにも、また同じ意味をもつ英語の“calling”という語のうちにも一層明瞭に、或る宗教的な、神から授けられた使命という観念が込められた」ものだった。ルターにおいては、まだ、「世俗の職業労働こそ隣人愛の外的な現れである。……分業は各人を強制して他人のために労働させる」と考えられていた。そこでは、スミスの場合同様、ビジネスに専念することは、隣人愛というケアの現れなのだと考えられていた。

ところが、そこにビジネスとケアの乖離が生じてくる。カルヴィニズムにより、「信徒たちの神との交わりは深い内面的孤立化のうちに行われる」ようになった時、ルターにおいては、神から与えられた使命(Beruf)であり、そして、隣人愛の外的な現れであった職業が、もはや隣人愛という「ケアの倫理」を失わせ、その「個人主義」が、他者への配慮という「ケアの倫理」を排除していくことになった。ルターの職業観のカルヴィニズムにおける変質こそが、神から与えられた使命としての職業を「現世の“魔術からの解放”」によってビジネスライクなものへと「合理化」し、それによって「罪人と神との関係が顧客と店主の関係に喩えられ」、「裁判の喩え

ではなく、商業の喩えが用いられるようになった」とともに、それこそが、言わばビジネスとケアの乖離をももたらしたことになる。

3. ビジネスとケアを繋ぐ

このように乖離し分離してしまったビジネスとケアとをもう一度繋ごうとする動きが、ビジネス・エシックスをめぐる議論に一石を投じることができるのではないかと。ここでは、いくつかの動きについて検討してみたい¹⁴⁾。

ビジネスが営利活動であるのに対し、ケアは非営利活動と言えるとする、例えば、或る事業(有償になりうる仕事・作業)を無償で行う慈善事業は、「ビジネスのケア化」の一種として考えられる。いずれの宗教にも、「慈善」「博愛」「慈悲」のような無償で人のために働く奉仕活動があったようだ。中世ヨーロッパには、「高い身分に伴う義務(noblesse oblige)」という思想があった。それが、現代では、宗教的背景を必ずしも伴わない「ボランティア」となっている¹⁵⁾。

ボランティアは、自発性、無償性・非営利性、公共性によって特徴づけられる。だが、無償奉仕には限界がある。生活にゆとりのある間しか続けられないし、そもそも経済的に余裕のある者にしかできない。ボランティア活動の持続性を支えるために、1998年にNPO法人(特定非営利活動法人促進法)が施行された。「NPO法人」として法人格を得たボランティア団体により、ボランティアが個人ではなく組織として、行政や企業と正規に契約を交わす事業主体となった。それとともに、非営利は必ずしも無償を意味するのではないと、有償ボランティアのあり方が重視されるようになった。こうしてまったくの自発的な無償行為としてのケアというあり方から、営利追求を目的とするのではないビジネスのやり方を取り入れることになった。

慈善活動から由来するボランティアと、そのNPO法人化は、それで貴重な活動とは思いつつも、それが、必ずしもケアとビジネスの幸福なつながりを取り戻すものとは思えない。NPOの世界では、使命の追求を重視するあまり、運営効率やコスト意識は希薄であり、そのため、企業(ビ

ビジネス)とNPO(ケア)は、互いに距離を置いたまま交わることはなかった。

そういう状況を変え、ケアとビジネスの新しいつながりの可能性を示したのは、1980年代初頭にイギリスで生まれた「社会起業家(social entrepreneur)」だった¹⁶⁾。彼らは、働くという行為を単に収入を得る手段としてだけでなく、自己実現の場だと考えている(脱ビジネス性)。彼らは、社会や環境は人権など、地球規模の課題や地域社会が抱える課題に対して使命感を持って挑み、事業を行っている(ケア親和性)。そこにあるのは、「NPOのような企業」「企業のようなNPO」であり、また、それがもたらしたのは「ビジネスの社会化」「NPOのビジネス化」だとも言われる。そこにビジネスとケアの結びつきの一つのあり方を見ることができよう。

社会起業家は、起業の社会的責任(CSR: Corporate Social Responsibility)の延長線上に登場している。利益だけを追い求める姿勢はかえって逆効果で、むしろ社会的責任という課題に取り組むことが、信頼関係を築き、評価を上げ、結果的には売り上げにつながる。

「あくどい商売はしない、不正は犯さない、他人をいたわる、社会に対して正しいことをする、本当に自分がやりたいことを仕事にする」という価値観が主流となってきた。社会に貢献しながら利益を上げられるビジネスモデルを提示しているように思われる。

おわりに

現代においてビジネスとケアを再び統合しようとする動きの一つの例を社会起業家のなかに見た。重要なのは、この社会起業家の価値観には、働くことの意味の転換を見ることができることだ。もはや、利益だけを追い求めるビジネスのためではなく、人のためになるケアのために働く、そしてそれが生きていく糧となっていく、そういう倫理をそこに見ることができる。それはビジネスとケアとを結ぶような倫理(エートス)のあり方を示しているように、私には思われる。

注

- 1) 本稿は、拙稿「ビジネス・倫理・ケア」（西日本哲学会編『西日本哲学年報』第17号、2009年10月、93-110頁）の続編でもあり、一部それと重複するところ、それを前提しているところもあるので、参照いただければ幸いである。
- 2) 本稿は、2010年2月13日（土）神田外語大学において開催された国際シンポジウム「ビジネス・エシックスを多角的に考える」におけるパネル・ディスカッション：「ビジネスとケア——ビジネス・エシックスへの新しい倫理的アプローチ——」において口頭発表したものを原稿に書き改めたものである。
- 3) 「ビジネス」「ケア」という語それぞれの多義性については、前掲拙稿（注1）参照。
- 4) キャロル・ギリガン（生田久美子・並木美智子訳）『もうひとつの声——男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ——』（川島書店、1986年）。紙面の制限上、出典の指示や原書の参照は割愛した。以下、同様。
- 5) 詳しくは、前掲拙稿（注1）参照。
- 6) 広井良典『定常型社会——新しい「豊かさ」の構想』（岩波新書、2001年6月）
- 7) アダム・スミス（水田洋訳）『道徳感情論』上・下、岩波文庫、2003年。
- 8) アダム・スミス（水田洋訳）『国富論』上・下、世界の大思想14・15、河出書房、1965年。
- 9) 堂目卓生『アダム・スミス——『道徳感情論』と『国富論』の世界』（中公新書、2008年3月）を参照。
- 10) スミスが「ケア」という語を使うのは、例えば、次のような場面である。「各人は確かに、自然によって、第一にそして主として、彼自身による配慮（care）にゆだねられているし、そして彼は他のどんな人よりも、自分について配慮する（take care of）のに適しているのだから、そうなっていることは適切正当である。」（上 p. 215/p. 161）。
- 11) しかし、このような堂目のまとめ方に、筆者としては疑問に思うところもある。それは、例えば、『道徳感情論』第二部第二篇「正義と慈恵について」の箇所をどう読むべきかが分からなくなるように思われるからである。先に「必要な援助が、そのように寛容で利害関心のない諸動機から提供されないにしても……、その社会は、幸福さと快適さは劣るけれども、必然的に解体することはないだろう」という箇所を引用したが、ここ「正義」について論じる箇所では、「正義は、大建築の全体を支持する支柱である。もしそれが除去されるならば、人間社会の偉大で巨大な組織は、一瞬に崩壊して諸原子になるにちがいない」と述べている。スミスにとって、社会が共感と世話の交換だけで成り立っているようには見えない。しかし、ここではその点を論じる余裕はない。
- 12) マックス・ウェーバー（大塚久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主

義の精神』岩波文庫、1988年。

- 13) 詳しくは、前掲拙稿(注1)参照。
- 14) 一部は、前掲拙稿(注1)で論じた。
- 15) 田村正勝編『ボランティア論——共生の理念と実践』(ミネルヴァ書房、2009年3月)参照。
- 16) 斎藤慎『社会起業家——社会責任ビジネスの新しい潮流』(岩波新書、2004年7月)参照。